

大江氏系図弁証―大江匡房の周辺―

山 崎 誠

要 旨 願文は神仏に宛てられた文書であり、妄語を恐れる心性から、その内容は世俗化した現代とは異なり信憑性が高いといえよう。この点に注目してみると、解決済みとされたり、見過ごされた問題について、願文はなお有力な証拠を提示していると見做なされる。その例証を大江匡房の家族関係について試みる。

はじめに

正統「群書類從」には「大江氏系図」四種が収められ、その中には、例えばかの頼豪を匡房の弟とする等の錯誤に満ちたものもある。^(注) また未翻刻であるが「大江系図」(東大史料編纂所本)には匡房の姉の名前を「鶴舟」とし、養子有元に「賦詩作文妙絶、時人称耆老之儒、朝廷皆謂之今孔丘云々」の注を加える。これらが何に基づくものであるのか興味深いものがあるが、「尊卑分脈」や「大江氏系図」に匡房の眷属について記される情報は、余り正確とは言えないものも打ち混じり史料批判が必要である。

「大江氏系図」の史料批判で有力な材料を提供するのは「江都督納言願文集」である。同書には、匡房の家族関係を窺う上での格好の史料となる願文群が多数存在する。願文は謂わば神仏に宛てられた文書だけに、その内容は妄語戒に担保されて信憑性が高いと考えられる(数字は巻数と作品番号)。

- ・ 生母「宮内大輔橘孝親女」 関係 5-8 「大江氏為母五七日」(永長二年十一月十四日) 5-19 「匡房為悲母六七日」(永長二年十一月廿一日) 5-20 「同諷誦文」 ④3-16 「匡房為悲母四十九日」(承徳元年十一月二十八日) 5-21 「匡房姉為悲母四十九日」(承徳元年十一月廿八日) 3-26 「匡房為先妣周忌願文」(承徳二年十月九日)

・ 外祖父「橘孝親」 関係 ⑤5-15 「江帥母堂為先考作善」

・ 姉「母橘孝親女」 関係 3-19 「同為阿姉尼作善」

・ 妻「紀伊守藤原重経(紀伊入道素意)女」 関係 ⑥6-1 「美作守匡房為亡室」 6-2 「同人為亡室(四周忌)」

作善」

・子息「隆兼」関係 3・21・22 「同為亡息（二通）」

小稿では④・⑤・⑥の三篇の願文を糸口にして大江氏系図を批判し、匡房の周辺人物の事績を説明してみたい。

外祖父橋孝親

⑥の5・15は目録題に「江帥母堂為先考作善」とある通り、寛治二年（一〇八八）六月、匡房が母堂になり代わって、外祖父橋孝親の遠忌追善のために草したものである。^{（注二）}「橋氏系図」によれば、孝親は橋内成男従四位下越中守と

あるが、終官である任越中守のことは、『国司補任』（宮崎康充編 一九九九年）に「御堂関白記紙背文書」（応徳三年正月）近代民部少輔受領例に「前守橋孝親」と見えるとの指摘がある。永承五年五月までは生存が確められる史料が存するので、この遠忌を卅回忌を指すと考えれば、孝親の没年をほぼ康平元年（一〇五八）頃と推定することができる。^{（注三）}匡房が十八歳で対策に及第する年である。

孝親の閏歴は出自生没年を含め不明な点が多く、豊かとは言えぬ事績を年譜風に掲げれば以下の通りである。^{（注四）}

長和三年（一〇一四）十二月廿六日、外記孝親座主補任に奉仕（小右記）。

長和四年、道長五十賀に外記孝親奉仕（「師通記」、寛治五年（一〇九一）十二月十七日記所引「左経記」）。

寛仁三年（一〇一九）六月十日、孝親天文習学の宣旨を蒙る。

寛仁四年十一月十七日、少内記孝親、同閏十二月卅日、内記孝親勅答を作る（左経記）。

万寿二年（一〇二五）三月二十三日、出雲守赴任（兼大内記）。

*「行成詩稿」万寿四年九月重陽詩の「大内記橘□□」は孝親（桃祐行「行成詩稿に就いて」『書品』53）。

*小野僧正請雨行法賀雨詩に「柱下（内記のこと）小臣須早記」とある。

長元元年（一〇二八）七月廿五日、「改元赦文」執筆（改元部類記）。

同二年七月一日、前出雲国守（小右記）。

*同四年十一月十九日「後一条天皇朔旦冬至大赦詔」執筆。

*同七年五月関白左大臣頼通家法華三十講作文「月是為松花」。

長曆三年（一〇三九）閏十二月二十日、大内記兼文章博士（春記）。

長曆四年十月廿二日、文章博士として改元年号勘申、同十二月二十一日、大内記を辞す（春記）。

長久二年（一〇四二）三月廿七日、能登守を辞し藤原定成に譲る（春記）。

*永承五年（一〇五〇）五月十八日「北野廟供養仏経願文」從四位下行宮内大輔。

祖父孝周と外祖父孝親の文章博士の在任期間は、各一〇二五〜三二年、一〇三九〜四二年と重なることは無かったが、相前後して文章博士であった。「春記」長久元年（一〇四〇）九月八日条に「昨日可勘申年号之博士等、奏事由先申執柄、仰右大臣已了、孝周朝臣、義忠朝臣、孝親、〈文章博士今一人闕也〉玉体今夜頗発御云々」とあり、年号勘申などでほぼ活躍時期を同じくし、詩友でもあった。江橘両家は通婚圈にあり、匡房の両親の婚姻には親同士の意向が働いたのであろう。

匡房は外祖父の孝親のことを「江談抄」の中で次の如く回想している。即ち巻五には、「橘孝親父〈名可尋〉求可為師匠之者、祈請其先祖建学館院之者〈名可尋〉とあり学館院を創設した氏公の末裔であるとの矜持があったらしい。匡房も橘氏の流れを汲むことを意識していたに違いない。

本願文の「外嗜風月、内帰仏法」はその為人を熟知した匡房ならではの表現であろう。即ちその詩文の才については、川口久雄氏が「故工部橘郎中詩卷」（橘正通の別集）を孝親の別集とみているのは誤認であるが、「日本詩紀」・「中右記部類紙背漢詩」五ほかに詩篇（長暦二年の曲水宴に講師を勤める）が残される（後藤昭雄『日本詩紀拾遺』二〇〇〇年）。

仏道に関わっては「本朝文集」に「北野廟供養仏經願文」などが見え、「江談抄」には「白氏文集」が大乗經の下、小乗經の上に入るといふ説を信じて仮初めにもその反古で漢をかむことがなかったという逸話があり（「文集中有他作事」）、内には仏法に帰すに関わって、「江談抄」には、「美州聞之、被談云、橘孝親作、内秘菩薩行詩云、清丹地珠長琢、十四秋天月暫陰」之句、上七字不似下七字、明衡云、試求之未得云々。而先年都督被案云、上九何無此哉云々。仍問其句、被答云、「清涼夏水蓮猶終」、此如何云々。僕申云、然則似齊名詩歟。件詩云、「眼蓮豈養清涼水、面月留十五天」之句、彼詩若為避此句、強求上句歟。仍有甘心之氣歟」という詩話を記録している。「法華經」五百弟子品の經句に基づく詩題と願文の句の類似は、この詩が孝親の代表作として人口に膾炙していたことを仄めかしたものでなからうか。孰れにしろ孝親は年若い匡房に父成衡とは違う文人としての影響を与えたと見られる。

父 成 衡

③ 3-16 「匡房為悲母四十九日」は匡房の亡母、橘孝親女の満中陰の追善願文である（永長二年（一一〇九）十月九日没）。匡房の亡母の追善関連の願文は、以下の通り願文集の卷三と卷五の両卷に亘って六首収められている（編

纂の杜撰さが露呈している。

① 5-8 大江氏為母五七日（永長二年十一月十四日）

② 5-19 匡房為悲母六七日（永長二年十一月廿一日）

③ 5-20 同諷誦文

④ 3-16 匡房為悲母四十九日（承德元年十一月二十八日）

⑤ 5-21 匡房姉為悲母四十九日（承德元年十一月廿八日）

⑥ 3-26 匡房為先妣周忌願文（承德二年十月九日）

②の六七日の追善願文によれば、大江成衡の死後廿八年間尼として過ごし（通常周闋が終わり剃髪する）、八十三歳の天寿を全うしたらしい（「剃_二花髪_一而廿八年、練行風芳」「八十三年之冬景、縦含恨於少雪之時_二」。逆算すると、長和四年（一〇一五）の生まれ、成衡との死別は延久元年（一〇六九）のこととなる。これは成衡の伝記説明の上でも確かな手懸かりとなる（「朝野群載」康平六年十一月八日の日付のある対策文評定夾名に彼の名がある）。

匡房は本願文に見る如く、この年五十七歳であり、母子の年齢差は廿七歳となる。匡房には二歳年長の同腹の姉（真偽はともかくも系図には「鵜舟」という名を記す）があり、①と⑤の願主はこの姉である。それ故、成衡と孝親女の結婚は長暦三年頃と推定される。

一方、父大江成衡の生年は明らかでない。閏歴も不明で大学頭・信濃守に任じ、従四上に叙されたことが系図によって判明するくらいである。祖父挙周が永承元年（一〇四六）六月に没しているので（「続本朝往生伝」による）、挙周が五位藏人に補された寛弘三年（一〇〇六）に成衡が生まれたとすれば『平安人名辞典』でも長保二年以後の出生とする）、匡房の生まれた長久二年（一〇四一）には三十五歳くらいと見るのが妥当であろう。当時としては両親

とも晩婚である。そのように考える理由は願文の表現の中から指摘できる。

即ちこの願文に「白氏文集」を踏まえた「往日三牲之養、少及庭闈」の修辞があるが、原詩（白氏長慶集）卷二諷喻・贈友五首は「三十男有室、二十女有歸、近代多離亂、婚姻多過期、嫁娶既不早、生育常苦遲、兒女未成人、父母已衰羸、凡人貴達旦、多在長大時、欲報親不待、孝心無所施、哀哉三牲養、少得及庭闈、惜哉萬鍾粟、多用飽妻兒、誰能正婚禮、待君張國維、庶使孝子心、皆無風樹悲」であり、晩婚の風を改めることを諭したもので、「秦中吟」の議婚に連なる主題を持つ作品である。願文に記されるところによれば、両親の成婚時の年齢関係もほぼこの白詩の通りとなり、詩の内容は或る程度匡房の実感するところでもあったろうと思われる（白楽天の伝記と自らの生涯を重ね合わせるのは当時の文人貴族達の思考様式）。つまり願文の表現の生成には明らかに前記の白詩が踏まえてあると見ることができる。

以上の考察から成衡の没年を正確には明らかにし得ないながら、稿者の推定の如く一〇〇六年前後の出生とすれば、匡房が二十九歳の延久元年までは存命で、六十四歳前後で没したと推定される。

それにも関わらず匡房は父の追憶を語ることが希であるが、神田本「江談抄」には、有名な「又被命云、亡考者道心者也。毎日念誦読経敢以不懈。雖然自不然。彼道心之堅固事非他事。吉々有其仮歟。又者頗可謂信者。常頸紙不差水干ノ如法師衣ナルニ、結紐ニテ五十許ツラモキタル、珠数ヲ持テ、不論精進不精進、雖食葷腥、以先聖先師助給ト云、為其口実。或又常披累代之文書、修理其朽損、皆悉捺印重之無極。或人問云、何故如此ナルト問、弊身ハ江家文預也ト被命云々」があり、「水言抄」には、次のような逸話がある。

又平家自往昔、累代伝相人之事。又惟仲中納言、其母讃岐国人也。珍材為讃岐介之時、所生子也。而去任之後尋來。珍材召入相之云々。汝必至大納言歟。但依貪心頗有其妨、可慎之也云々。後果至中納言

言、為「太宰師」件時、宇佐宮第三宝殿付封也。依「件事」被停任也。是往年先親所「伝語」也云々。

この平惟仲が宇佐の宝殿に封をして、神人に訴えられた事件は「石清水文書」によれば長保四年（一〇〇三）八月十五日のことであるから、成衡未生以前の出来事である。匡房の宇佐信仰と関わって興味深いのが、成衡の直接体験ではなく、幼少の砌、匡衡（長和元年へ一〇一二）没）あたりから聞き及んだことではなからうか。匡房は明示しないが、成衡を通じて匡衡の活躍した旧時代の多くの物語を聴いているようだ。

願文集に成衡の為の願文が存しないのは、生母の方が長命であることも一因であるが、上來述べたごとく、父が比較的早く世を去っていたことがその一因であろうと思われる。^{（注五）}

岳父藤原重経と息男維順

匡房は承保四年（一〇七七）四月十七日、三十七歳の時の妻を喪っている。◎6-1「美作守匡房為亡室」願文はその満中陰の供養願文、次の6-2は四周忌の願文である。匡房の妻としては、隆兼の母となる女性が知られている。藤原重経（紀伊入道素意）女である。従来の伝記研究によれば、本願文で出産を控えて死亡する妻は、その内容の分析から「上達部の家柄の出自である夫人は、妊娠していたが病んで落飾出家、ついで十七日にあえなくみまかった。願文は子のことについていないから、ついに生まれなかったのかもしれない。彼が三十七歳だから、三十前後であったかと思われる」（川口久雄『大江匡房』一九六八年）と叙されるに止まり、この重経女とは別人と考えられている。^{（注六）}以下やや奇矯とも受け取られるかも知れないが、本願文の亡室を隆兼の弟（維順、本名匡時）を産んだ後、死亡した重経女と推定したい。そのように考える理由は次のようなものである。

実子隆兼の没年は匡房六十二歳の康和四年（一一〇二）であり、享年については不明であるが、「水左記」の承暦四年（一一〇八）正月十二日条「被_レ仰_下補_下藏人_二之由_一、圖書助源家賢（高房朝臣男、前文章得業生大江隆兼（匡房朝臣男、等也）」によれば、この時既に二十代後半に達している。従って康平年間（一一〇五—一〇六四）の間の出生となる。匡房と重経女との結婚もほぼその頃とみてよからう。

願文によればその妻は①「出自累葉槐棘之地、長于繁華清英之家」とあって公卿の家柄に生まれた女性である。消極的な理由であるが、重経の実父は正二位兵部卿（太宰帥）重尹（懷忠息）であり、この条件を満たしている。「槐棘」は当時の用法から公卿の意と解され、敢えて「槐」の血筋の穿鑿には及ぶまいし、匡房は所詮諸大夫階層なので、治部卿藤原経任の如く好意を寄せる支援者もあったが、槐門の家柄が通婚圏であるとは考え難い（^{注七}）。

②として「松茂栢悦之契、纔盈暮年、桑弧蓬矢之期、漸待旬月」と述べている。この表現は源師時の616「源中将為亡室周忌願文」の「亡室藤原氏、出_二月卿之貴種_一、受_二夏姬之麗華_一。婦節不_レ渝、雖_レ知_レ有_二松茂栢悦之貞_一、子葉遲_レ生、唯歎_レ無_二桑弧蓬矢之慶_一」などの類似表現があり、出産を控えた契りも濃りやかな妻が、慌ただしく死去したものと読める（当時よくあった胎衣が出ないなどの事故によって、或いは高齢出産のため）。注意したいのは、恐らく月は満ちていたので、生まれ児は（「礼記」に基づく文飾でないとすれば）男子であることが確認されて、育った可能性があることである（源師時の場合には終に子供そのものに恵まれず、妻と死別したのである）。

「纔盈暮年」は検討の必要な箇所（^{注八}）で「纔」の義、語構成の上からみると、「暮年」は「暮年」（暮は期の別体）の誤写と見ることもできる。しかし、六地藏寺本・歴博本ともに「暮年」に作り、前者には「ホ」の訓がある。字義通りに考えるならば、「年来妹背の契りを結んでやっと暮年にさしかかったばかり」の意となろう（重経女が十八歳で隆兼を生んだと想定して、この時卅三（七歳））。

③には「弟子、身非_レ莊生、不能_レ叩_レ盆而歌。材異_二曾子_一、共隔_二合簪之義_一」とあって、前対は「莊子」至樂の故事、後対は「顔氏家訓」後娶の「曾參婦死、謂_二其子_一曰、吾不_レ及_二吉甫_一、汝不_レ及_二伯奇王_一」や「孝子伝」の「妻死不更求_二妻_一。有人謂_二參曰_一、婦死已久、何不_レ更娶。曾子曰、昔吉甫用_二後婦之言_一、喪_二其孝子_一。吾非_二吉甫_一、豈更娶也」などで有名な「終身不妻」故事を踏まえる。これが単なる悼亡の文学的修辭に終わらず、匡房の後半生をも拘束する仏に対する誓言であるとすれば、この故事に倣って、後妻を娶らなかつた筈である。これこそは「子孫カワロク」とされることの最大の要因でもあろう。匡房は維順の器量を見抜き、後に見るように血統によらず養子という制度で家業_二家職_一を相続させようとしたと考える。^(注一〇)

隆兼の追善願文、3-22の「弥陀法花者、在室家之丹誠。豈非_二夢後之精勤_一乎」(康和五年)について川口氏が「法華経は生母の書写であつた」としているのは明らかに失考。室家は妻の意であるから、経供養者は隆兼の妻淡路守頼成女であり、隆兼の生母はこの時点で既に死去して何ら不都合ではないのである。

推定の如く、仮にこの承保四年の生まれの男子があり、成人して系図に残される可能性があつたとすれば、系図中に見える維順その人であることを否定しきれまいと思う。匡房とは三十七歳の年齢差があり、第一子隆兼とも廿歳程度の開きがあり、彼等の間に広房の妻となる姉がある(注一三で触れる如く、維順の実年齢と閏歴の間の違和感齟齬が問題となるが、それには後述の維順自身の個人的理由が潜んでいよう)。^(注一一)

維順の事績

維順についても史料に乏しく多くは推測の域を出ないが、次のような事績を諸史料から抽出してみた(便宜、臆測

に従って承保四年出生と仮定して年齢を表示しているが、へは維順が五年後、別の女性が生んだもののとの仮想に立ち、推定した年齢を示す。「」内は匡房・隆兼・維順〈匡時〉・広房・有元・匡周らの推定を含む年齢。

天喜（一〇五八）六二 隆兼誕生 134？

承保四年（一〇七七）四月十七日、室家没、維順誕生 135 [房37 隆20323]

嘉保元年（一〇九四）十二月廿九日、匡時給料宣旨（中右記） 18313 [房54 隆37440]

永長元年（一〇九六）十二月廿六日、江中納言息男二人元服云々（中右記） [順20315] 広23？ 元23？ 周9？

承德二年（一〇九八）二月三日、有元献策（中右記）

康和元年（一〇九九）十二月廿九日、文章得業生大江匡時〈給料一〉（本朝世紀・中右記）

康和二年（一一〇二）閏五月四日、隆兼没 4548 [房62 順26321] 周13？

康和五年（一一〇三）六月三日、今日秀才大江匡時献策、問頭在良朝臣 [順27322]（「本朝統文粹」「本朝世紀」

〔中右記〕 大江広房補六位藏人 [30？] 大治二年（一一二七）四月九日までは生存（中右記）

長治元年（一一〇四）、大江維順〈康和五年冊、長治元年任也〉（「除目大成抄」七課試及第献策者直任式部丞例）

同年四月廿九日前女御源基子家当年給申文「正六位上行式部少丞大江朝臣匡時」（「朝野群載」四朝儀上）

天永二年（一一一一）十月五日、（忠通邸）作文。儒者在良朝臣、敦光、五位匡時、行盛、尹通…文章生実親、広房…^{（注二）}

（中右記・永昌記）

天永二年（一一一一）十一月五日、匡房没 71 [順35330]

永久二年（一一一八）十二月卅日、次第二位給料国秋被補秀才、越一給料匡周（中右記） [周29？]

保安元年（一一二〇）四月九日、以秀才匡周補藏人云々、〈大学助〉（中右記） [周31？]

保安三年（一二二二）菅原在良没 一〇四三

天承元年（一二三一）十二月、任彈正弼、（歷四年）長承三年正月兼讃岐介（「大間成文抄」五兼国彈正大弼兼国例）

長承二年（一二三三）七月廿一日、「身儒第二、年齒已過五十、而為子申學問料無恩許、預判多以被超下臈」（長秋

記）「順57？〈52〉」

長承三年（一二三四）正月、任阿波權介、彈正弼（「大成抄第五」）

保延三年（一二三七）正月五日、匡周叙從四位下、〈策〉（「中右記」）「周48？」

天養元年（一二四四）十二月卅日、維光學問料宣旨（「兵範記」）藤原敦光没 一〇六三

久安四年（一二四八）正月廿八日、任讃岐介、大學頭（「本朝世紀」）大學頭は從五位上相当

仁平二年（一二五二）正月五日、大江維光〈式部〉叙爵（「兵範記」）

久寿元年（一二五四）寮試、この頃没か78？〈73〉（「兵範記」）

「中右記」の永長元年（一二〇九）十二月廿六日「江中納言息男一人元服」の記事があり（この元服が「元服叙爵」を意味するとすれば、「選叙令」の三位の蔭位叙爵の規定により從六位下に叙されたであろう（服藤早苗「元服と家の成立過程」『家成立史の研究』へ一九九一年）。この息男が承保四年に誕生した維順と養子有元又は広房である可能性を棄てきれない（彼等以外に誰が考えられようか）。^{（注10）}維順が匡房の実子であることは、「葉黃記」宝治元年（一二四七）四月二十七日条に、文章得業生菅原在匡と公長との間で座次相論があった折りの諸道勘文が記録されており、その藤原経範の勘文「猶子事」の一節に「憶猶子之義、和漢之間、蹤跡相存、在匡者、雖似違養子之法、猶以多先儒之例歟、所謂匡房卿拳匡周、其時嫡男散位維順、永範卿拳尹範、其時嫡男大内記光範、（以下略）」とあり疑いのないところである（勿論匡房の実子であることは隆兼と「同胞」であることと同義ではないが、律令的な觀念で

は「嫡妻之長子」を嫡子というのである）。この記事は隆兼亡き後、維順が嫡子として認知されていたものの、匡房は孫の匡周（隆兼息）を蔭子叙位に推挙したと言っているのである。

維順が給料学生になったのは十八才と推定され、格別遅くもなかったが、方略試を経ても得業生↓文章博士という教官の道を選択できなかったことは事実であろう。匡房の没後官位の遅滞やそれに伴う鬱屈があるとすれば、やはり「長秋記」の謂う「少時依_レ有_二無才聞_一」と関係_{（注一三）}しよう。彼が預判にも与らず、子息（維光か）が給料学生の宣旨を受けられず、大学頭といういわば事務職に甘んじていたのには、上位に耆儒として在良と敦光が長命でいたことのみ理由があるわけではなく、やはりこの「長秋記」に記されることに原因があるものと見なされる。それは年譜にも読み取れるところではあるまいか（維順が不肖であることの証明であっても、誰を母としているかの証明でないのである）。

匡房にとっては家督を相続するのは隆兼であると期待を懸けていたことは、3-22「同為亡息」願文の「累祖相伝之書、收拾誰人、愚父愍遺之命、扶持何輩」に見る如く、これまた「白氏文集」自嘲の「五十八翁方有_レ後、静思堪_レ喜亦堪_レ嗟、一珠甚少還慙_レ蚌、八子雖_レ多不_レ美_レ鴉、秋月晚生丹桂實、春風新長紫蘭芽、持_レ盃祝願無_レ他_レ語、慎勿_三頑愚似_二汝爺_一」を踏まえる文飾、3-21の「文殊師利之後身、遂遺_二慙蚌之恥_一」からも推定できる。又先に見た如く自ら「只所遺恨ハ、不歴_二藏人頭_一ト、子孫カワロクテヤミヌルトナリ。家之文書、道之秘事、皆以_レ欲_二湮滅_一也」（「江談抄」都督自讃事）と語ってもいる。匡房の没年には維順は既に三代半ばに達していたと推定されるが、後事を託することができなかったのであろう（難産であったために維順自身も出生時に何らかの障碍を持ったと想像すことは許されよう。それを克服するために長い年月が必要となったのかも知れない）。

臆測の検証

ここに私見を補強する例を挙げておきたい。徳大寺実定の「林下集」には一群の悼亡哀傷歌があることは良く知られている。この女性が承安三年（一一七三）に没した師長卿女であることは先行研究が既に明らかにしている。「転法輪鈔」の「前大納言実定為亡室堂供養表白」（『言泉集』にその摘句あり）は、その周闕忌法要の表白で、これによると匡房室家の状況と酷似していることが判る（時に実定は三十四歳）。長文であるが前半を引用してみたい。なお、この周闕忌の記事は「吉記」承安四年八月二十四日条に「今日前大納言（実定）、室家周闕也。亡者嚴親納言八條猪隈亭中建二間四面小堂、安置等身釈迦三尊被供養也。依彼招引、午刻行向、未斜事始。權大僧都澄憲為導師（法服）、題名僧六口（着宿装束）、藏人五位二人（信賢、範実）勤堂童子（衣冠）。文章博士敦周朝臣草願文、左宰相中将清書、（略）」と見える。敦周の願文そのものは残存しない。

前大納言実定為亡室堂供養表白 敬白云、信心大施主特進前垂相殿下、抽一心清浄之丹誠、凝三輪相應之白業、建立一字伽藍、安置三尊形像、手自書寫金字紺紙妙法花經一部真文、令三人模寫六部妙典、備香花、囑僧侶調道儀、展齋筵。其御願旨趣何者、夫悠悠生死之塚、来而未永留之人。冥冥孤独之路、去而更無再帰之魂。是以、瑩石造像弥迷、恋慕悲哀之情、焼香反魂更殘、漂眇悠揚之怨。悉是古今之常憂、実即分段之定理也。伏惟、亡室幽儀納言鐘愛之長女、四徳六行之賢婦也。窓中養艷花粧偷媚、帳外秘音慧心自聞。忽以二十有二廻之蘭質、始配伉儷、遂送廿五年之星灰、屢茂子葉。合歡衾下、偕老之契殘多、想思枕上、同心之交未半。豈図、去年八月之天下旬九日之夕、桑弓蓬矢之慶空變、火滅風散之悲忽至。訴天天命不能延、祈仏仏力不能

及。旧巢覆而遺卵多留、属戸鳩於誰人。故困荒而古枕猶殘、期比翼於何処。万端悲緒未_レ休、一周忌景忽至。春草暮秋風驚、猶知_二一意不_レ改。曉露結朝霜降、自悟_二万物無_レ常。唯須_二絶_二天上人間之後縁_一、祈_二西方上品之前途_一思食者也。依_レ之、就_二幽儀先考之旧居_一、建_二一間四面之新閣_一、安_二三尊於今日_一蕩一念於昔時。其故者、此処則旧主納言多年栖息之地、亡室幽儀時時遊戲之砌也。(以下略) (歷博本「転法輪鈔」)

傍線部には明らかに匡房の願文が踏まえられていると覚しい。「尊卑分脈」には師長女所生の公綱、公守兄弟の次に生母未詳の公広を釣るが、維順の場合と同じ状況であれば、この公広こそが師長(外ならぬ維順が家司を勤める)女所生の第三子であり、彼の出産と同時に落命したことになるであろう。藤原実兼の孫に当たる澄憲ほどの人物であれば、維順の出生の事情を知らぬ筈はない。

「夕霧」の例を引くまでもなく、当時この様な事例はさほど希なことではなかったに違いない(「言泉集」亡妻帖に「産婦天死文」「産婦往生文」等がある)。事例を更に追加すれば、説得力を増すに違いないが、決定的な文証が無いので所詮推定の域を出ない。

実定の場合は程なく琵琶の名手上西門院女房備後との間に婚姻関係が生じ、公継(安元元年誕生)が生まれていること中村文氏の指摘がある通りである(「後白河院周辺の廷臣たち」『後白河院時代歌人伝の研究』二〇〇五年)。匡房が家女房や妾を求めなかったとの断定は慎まなければならないが、先に検討した曾参の故事の引用にも重いものがあるであろうし、広房、有元、家保らをつぎつぎと養子としていることは、血統よりも能力を重視して家業を養子制度に委ね維持せざるを得なかったことを明かしている。

この背景に(広房、有元、家保らの立場から見れば)、重代の菅江二家及び南北式の傍系藤氏のいずれかに属しなければ儒業を遂げ難いという事情があったにせよ、匡房が複数の女性との間に子供を儲けなかったことを消極的なが

らも示唆しているよう。

史料が存在しない以上、考証そのものが粗略にならざるを得ないが、願文の背景にある匡房の家族関係を以上の如く解き明かし、聊か「大江氏系図」の史料批判を試みた。

〔注〕

(一) 『統群書類従』一七六の「大江氏系図」。この頼豪は「大僧都有驗高僧」とあれば、「平家物語」の頼豪風説話の主、園城寺の頼豪が系図に嵌入されたのであろう（薩摩守平生成男で、大江挙周の養子となった林豪との混同もあろう）。

(二) 小峯和明氏が「『江都督納言願文集』の世界（六）」で、父成衡の作善願文（施主母）としているのは誤りである（『院政期文学論』二〇〇六年所収）。

(三) 鎌倉時代に十三仏事が定着するまでの遠忌の捉え方には難しいものがある。高木豊氏によれば周忌後の忌日を遠忌と汎称していると考えられる（『平安時代法華仏教史研究』一九七三年）。

(四) 槇野広造『平安人名辞典 長保二年』（一九九三年）を、その他の記録により補う。

(五) 現存する匡房の願文製作の初例は「源師房室五十日逆修願文」で、廿一歳の折のものである。

(六) 匡房の妻に関して次のような言説がある。『能勢町史』第一巻（二〇〇一年）には「西山地藏院文書」の「西倉村相伝系図」を引き「これは長町荘内の西倉村に関する相伝系図で、一一世紀の大江匡房から一四世紀の近衛局に至る継承関係が記される。まず最初に、後三条・白河・堀川三代の天皇の侍読としてつかえた大江匡房の名が出てくる。これは少し出来過ぎの感もしないわけではないが、先述のように長町荘自体が後に後円融天皇の侍読菅三位長衡の所領として、西山地藏院に寄進されている事実からしても、必ずしも不自然とはいえない。現に川口久雄は、その著『大江匡房』（吉川弘文館、一九六八年）で、この系図に基づき、大江匡房は摂津国長町荘内西倉村に領地をもっており、「室家従三位家子」に相伝させていたと述べている。この「従三位家子」というのは、おそらく堀河天皇の乳母「帥三位家子」（角田文衛『日本の女子名』上、すなわち太宰権帥大江匡房の室だったのにちがいない。とすると能勢探銅所の預々奉行の職を世襲した大江氏（通称野間氏）との関係も想起されるが（下略）」（丹生谷哲一氏執筆）という記述が見られるが、『江都督納言願文集』の5-04「帥三位

奉為堀川前皇千日講供養願文」に見る如く帥三位家子は藤原家範妻（常陸介家房女で、常陸典侍、帥三位と称される）讃岐典侍日記」では大式三位と呼ばれる。白河院の寵臣大膳大夫藤原家範の妻となり、修理大夫基隆、出雲守家保らを生むとともに、善仁親王（堀川天皇）の乳母となり、承徳二年（一〇九八）從三位に叙される）のことであり、賛成しがたい（この系図は疑わしい内容を含んでいる）。高名な歴史家の執筆されたものだけに影響力を懼れ敢えて指摘しておく。

（七） 隆兼も「本朝無題詩」卷十山洞「温泉道場言志」（現在二日市温泉付近の武蔵寺と推定される）の什「尋地適伝前日跡、懷郷暫□外朝塵」に「長久年中、外祖於此地賦一絶。康和年中、予亦於此地綴六韻、故云」と自注して、態々太宰権帥であった重經に言及している。「系図」大納言元方—中納言懷忠—兵部卿重尹—紀伊守重經—匡房家室（尊卑分脈）では懷忠—令尹—懷尹—重經と鈎るが、肩付きに「実者重尹子」と注している。因みに匡房の家室がここに推測するように重經女であるとするならば、岳父である紀伊入道重經は「多武峰略記」「粉河寺縁起」に依って、康平七年（一〇六四）出家、嘉保元年（一〇九四）十月十五日示寂したことが判るので、娘の没後も猶二十年近く生存したことになる。

（八） 記録語として日記に頻出。「本朝文粹」414同院周忌御願文「後江相公」「堂構漸久、莊嚴未訖、尽丹青於一心之中、成粉墨於期年之内」などがその用例。「統本朝文粹」には用例なし。「江都督納言願文集」には「暮年」の三用例あるも、「期年」の語なし。この方向であれば、室家は匡房との結婚の一年後に出産によって死亡したことになる。そうすると私達は必然的に維順の生母である第三の妻捜しをしなければならなくなる。

（九） この一節は「言泉集」に引用される。同書の「亡室告別以来、隔音塵於黄壤、灑渡雨於紅圍、才非漆園之吏、擊缶何為、悲類鬬賓之禽、舞鏡无益、敦光」も荘子故事。

（一〇） 匡房の子息は大江氏の系図によれば、隆兼、維順、広房（実父橋以綱）、有元（実父源有宗）の四名が知られるのみである。これ以外に、広房の妻となった女子の存在（『平安遺文』一七六一）、及び藤原顕季の息男で白河鳥羽院近臣として有名な家保について、「中右記」永久二年一月五日条によれば「出雲前司家保」が治国の賞で從四位上に加階されたことを「是故匡房卿依為養子」の故であったと記している。荘園史研究史上有名な広房の実父は氏長者で学館院別当でもある鎮守府將軍以綱で、広房は天仁元年（一一〇八）信濃守に任じられた後、天永二年（一一二一）十一月に本姓に還っている（『平安遺文』一七六二）。匡房の母も橋氏であるが、以綱と孝親との間に血縁関係があったものであるうが、姻戚関係等は一切不明である。広房の妻は系図上には現れないが、小稿の文脈に沿えば、維順と年齢の接近した同腹の姉と推定される。

文章博士となつた有元も為平親王の曾孫陸奥守有宗の子で『系図纂要』によれば、「中納言大江匡房卿為子、遂儒業改姓大江、後復本氏」とある通りだが、嘉保元年（一〇九四）十二月二十九日秀才の宣旨を蒙り、承德二年（一〇九八）二月三日献策して（「中右記」同日条に「有元者、陸奥守源有宗朝臣長男、江中納言養為_レ子也、仍勤字之間、先年雖給_レ學問料、_〇文章者不知其道云々」と見える通り）、文章博士として江家を継承している。貴族社会に於ける養子制度については、田端泰子「古代・中世の養子と「家」」（『日本中世女性史』一九九四年）などがある。

（一） 維順の名は「江談抄」では一切語られない。文事として維順の事績は匡房の死後卅年も経ち、漸く現れ始める（「兵範記」によれば久安五年（一一四九）十月十九日条に師長の家司となり、同年十月二十五日、仁平三年（一一五三）三月一日忠実の為の願文を執筆したことが判る。長承三年（一一三四）九月十三日頭輔家歌合にも加わるなど詠歌の才もあり、その資質は千載集歌人維順女や広元らに受け継がれている。「大納言実行堂供養（保延七年六月）」及び「大納言実行為亡室」の二篇の願文の逸文が「言泉集」に拾われる。

（二） この時、匡時は「散位」であるが下位にいる日野流行家の息行盛は、「永昌記」によれば勘解由次官である。後に有元と同時期の文章博士となる。「後拾遺往生伝」によれば長承三年（一一三四）64（又は62）没しているから、維順よりは八（八）歳年長である。広房は信濃守である。

（三） 嘗て父の弟子であつた源師時（奇しくも同年齢）の元を訪ねて次のような不満を述べている（この時点では敦光が存命で第二位の耆儒であつた。推定通りなら五十七歳で、「已過五十」と言うは不審。しかし、これをもとに逆算していくと彼の学問料支給の年齢が下がり、匡房や永範にも劣らぬ早熟であつたことになり却つて撞着を来す。知命を過ぎての意と解釈しておく）。匡衡、挙周、匡房、敦光、永範、頭業の対策及第の年齢は、各28、24、25、18、31、21、26歳である。

○長承二年（一一三三）六月廿八日条、源大納言（兄師頼）光臨給、被語云、去比自公家被尋仰云、左大弁実光朝臣奏、公家之耆儒評判、是常事也。兼吏部参議又預問、実光依不兼吏部、不可評判。而案事心、不預参議之判者、依不可着本省、而兼大輔之参議着之、参議不可着省者、雖兼大輔何着之哉。者雖不兼大輔、准彼例着省欲預判云々。此事可量申者、予申云、所申雖非無其理、先例無所見、許否間可任勅定者、後聞、雖有恩許議、遂右少弁頭業預判。江維順朝臣第二儒士也。而不預判、雖少時依有無才聞歟。近來儒士不可及彼例者也。

○長承二年七月廿一日条、源大納源来給、相統江維順朝臣入来、（略）江博士云、身儒第二。年齒已過五十、而為子申學問

料無恩許、預判多以被超下臆。於今江家長被捨道事也。近來居儒官者、必非高才博覽人。怨世氣色尤甚。有其謂。
 (一四) 文章博士の世襲化及び官司請負制化については、桃裕行「古代末期の大学—文章生歴名帳の検討」『著作集二 上代学制論攷』(一九九三年)、久木幸男「古代末Ⅱ王朝国家体制期の大学寮」『日本古代学校の研究』(一九九〇年)がある。

依拠する願文の全文を参考までにかかげておきたい。

④

【本文】

3 | 16 ¹ 為悲母四十九日 (² 願文)

(漫句) 先大夫七々忌辰、³ 奉圖絵極楽迎接曼陀羅一⁴ 鋪、奉書写色紙妙法蓮華經一部¹ 卷、⁶ 無量義觀普賢阿弥陀般若心等經各一卷、(傍字) 別 (漫句) 奉⁸ 写妙法蓮華經六部四十八卷、開結經各六卷。

(発句) 蓋、(長句) 当中有光陰已盈之剋、抽南無精誠¹⁰ 罔極之志也。(長句) 即¹¹ 掃多年之禪居。聊展一日之齋席。
 (輕隔句) 東籬菊殘、便¹² 充供仏之色。丹地水潔、自為施僧之珍。

(発句) 嗟呼。(重隔句) 往日三¹³ 性之養、少及庭闈。暮年数行之涙、徒滿¹⁵ 衫袖。(雜隔句) 昔¹⁶ 老萊之七十余也、斑衣之戲未能。今弟子之五十七也、¹⁷ 斬縗之色欲朽。(雜隔句) 平日念仏之功、¹⁸ 一茎之蓮早生池心、今朝講經之力、千葉之蓴定開座下。(漫句) 三宝不捨、誠以足矣。(輕隔句) 再会何日、¹⁹ 歷億劫而難知。²⁰ 三問幾年、過八句而長隔。(繁句) 念々之悲、生々難尽。(傍字) 凡 (平隔句) 恨之所遺、紙墨不存。心之所願、仏経是²¹ 憑。

(傍字) 乃至、(漫句) 法界衆生、平等利益。敬白。

²² 承徳元年十一月二十八日。弟子前権中納言兼太宰権²³ 帥大江朝臣敬白。

【校勘】 歷博本と対校する。

1 為 底本では冒頭に「大江朝臣敬白」の六字があるが、5 | 14の末尾と見て位置を正す。2 願文 底本^無、私に補う。3 奉 歷博本^無 4 鋪 底本「蕭」、歷博本による。5 華 底本「花」6 無 底本「无」7 各 底本^無、歷博本により補う。8 写 底本「鳥」、歷博本による。9 華 底本「花」10 罔 底本「因」、傍訓「ナキ」、及び歷博本による。11 掃 底本「払」、歷博本による。

る。12 充 平泉は「宛」に翻刻するも、底本・歷博本「充」 13 性 底本「性」、歷博本による。14 闌 底本「圍」、歷博本「哀哉三牲養少得及庭闈（孝養事也）惜哉昌鐘粟多用飽妻兒（文集二）」の欄眉注がある。15 衫袖 歷博本「素衣也」の傍注あり。16 老萊 歷博本「人名」の傍注あり。17 斬續 歷博本「素服也」の傍注あり。18 一 底本「二」、歷博本による。19 歷 底本「曆」、歷博本による。20 三問 歷博本「寝間問事也孝養」の傍注あり。21 憑 底本・歷博本「馮」22 承徳元 歷博本「永長二」と傍注あり。23 帥 底本「師」、歷博本による。24 江朝臣 底本「大臣」、歷博本による。

【訓読】

悲母の四十九日の為（の願文）

（作書）先の「大夫人の七々忌辰に、^三極楽迎接曼陀羅一鋪を図絵し、色紙妙法蓮華經一部八卷、無量義、観普賢、阿弥陀、般若心等各一卷を書写し奉り、別して妙法蓮華經^三六部四十八卷、開結各^六六卷を写し奉る。

（供養）蓋し、中有の光陰已に盈る「之」^{きやう}剋に当り、南無の精誠極り罔き「之」志を抽くなり「也」。即ち^四多年の「之」^五禪居を掃ひ、聊かに一日の「之」^六斎席を展ぶ。

（景気句）^五東離に菊残れり、便ち供仏の「之」色に充つ。^六丹地に水潔し、自ら施僧の「之」^七珍と為す。

（聖靈追慕）嗟呼。往日^七三牲の「之」^八養、少く庭闈に及ぶも、暮年数行の「之」^九涙、徒に衫袖に満てり。昔、^九老萊の「之」^十七十余なる「也」、斑衣の「之」^{十一}戯、未だ罷ま^{十二}《未》りき。今、弟子の「之」^{十三}五十七なる「也」、^{十三}斬續の「之」^{十四}色朽ちなんと欲す。平日念仏の「之」^{十五}功、一茎の「之」^{十六}蓮、早く池心に生じ、今朝講經の「之」^{十七}力、千葉の「之」^{十八}萼、定めて座下に開くらん。三宝捨てたまは不れば、誠に以て足りなん「矣」。再会何れの日ぞ、億劫を歴とも「而」^{十九}知り難し。^{二十}三問幾の年ぞ、三八旬を過ぎて「而」^{二十一}長く隔たれり。念々の「之」^{二十二}悲しび、生々尽き難し。凡そ^{二十三}恨みの「之」^{二十四}遺る所、紙墨存せ不。心の「之」^{二十五}願ふ所、仏經是れ憑まむ。

（廻向句）乃至、法界衆生、平等利益。敬ひて白す。

（年付日付位證書）^{一四}承徳元年十一月、弟子前權中納言兼太宰權帥大江の朝臣。

⑩ 【本文】

5-15 母堂為先¹考修善願文

(漫句) 先考尊靈遠忌齋筵、奉書寫妙法蓮花經一部八卷、開結經等各一卷。

(傍字) 抑、尊靈、(緊句) 外嗜風月、內婦仏法。(緊句) 思其後世、定到淨利。

(傍字) 然而、(平隔句) 慈悲之恩、歷劫難報、恋慕之涙、遂年弥新。(傍字) 仍、(長句) 手寫此難解難入之花偈、忝訪彼上品上生之蓮台。

(発句) 又別、(長句) 奉図絵阿弥陀五仏一鋪、書写心地觀經一部八卷。

(漫句) 弟子、(雜隔句) 禅林送老、雖迫七旬之殘文、滿月繫望、将出五障之暗雲。(漫句) 今講演之次、敬以供養。

(長句) 唯願円鏡之尊、照見匪石之心。(発句) 況亦、(雜隔句) 邪山春暖、皆開七覺之花、苦海秋澄、悉變八功之水。敬白。

(年付日付) 寛治二年六月廿二日。弟子比丘尼。

【校勘】 高次批判による。

1 考 底本「老」に誤る。意により改める。 2 先考 この字上に恐らくは「於」脱か。 3 逐 底本「遂」に誤る。意により改める。 4 之 底本無、対句構成上から補う。

【訓読】

一 母堂が先考の為の修善願文

(作善内容) 先考尊靈の遠忌の齋筵に、妙法蓮花經一部八卷、開結經等各^{おのづか}一卷を書き写し奉る。

(聖靈平生) 抑も、尊靈、外には風月を嗜み、内には仏法に帰し奉りき。其の後世を思ふに、定めて淨利に到りたまふらむ。

(供養因縁) 然れども「而」、慈悲の「之」恩は劫を歴ても報い難く、恋慕の「之」涙は年を逐い^{いよいよ}弥新たなり。仍りて、手づから此の難解難入の「之」花偈を写し、忝くも彼の上品上生の「之」蓮台を訪ひ^{もとよ}てまつる。

(作善内容) 又別して阿弥陀五仏一鋪を図絵し奉り、^五心地觀經一部八卷を書き写したてまつる。

(願意) 弟子、六禪林に老いを送り、七句の「之」残文に迫ると雖も、八満月に望みを繋げ、將に九五障の暗雲を出でむと《將》。今。講演の「之」次に、敬ひて以て供養す。唯し願はくは、二円鏡の「之」尊、三匪石の「之」心を照見したまへ。(廻向句) 況や亦、三邪山春暖かにして、皆四七覺の花を開き、五苦海秋澄みて、悉くに六八功の「之」水と變ぜむ。敬ひて白す。

(年付日付) 寛治二年六月廿二日。弟子比丘尼。

◎

【本文】

6-1 「(美作守匡房) 為亡室四十九日願文

(漫句) 弟子、某敬白。(輕隔句) 車形之郷、未免生死之理。輪廻之境、必逢離別之悲。(漫句) 慟哭之中、猶有難忍。

(発句) 伏惟、幽靈、(長句) 出自累葉槐棘之地、長于繁華清英之家。(輕隔句) 蘭猷惟馨、絳樹之露慙色。玉徳無玷、羅山之月讓

光。(重隔句) 松茂栢、悦之契、纔盈暮年、桑弧蓬矢之期、漸待旬月。(傍字) 而(長句) 自界之縁暗尽、他方之別忽催。(漫句) 去十七日、

長赴黄壤。

(漫句) 弟子、(輕隔句) 身非、莊生、不能叩盆而歌。材異曾子、共隔合器之義。(雜隔句) 泣而又泣、灑淚於北芒之月。歎而更歎、

銷魂於白楊之風。(雜隔句) 鸞鏡徒拋、平生之旧客何在。鴛衾空委、往日之余香猶遺。(漫句)

視聽所触、涕泗無從。

(発句) 方今、(長句) 万々之愁緒未断、七七之忌辰欲滿。(傍字) 仍、(漫句) 奉為頓証菩提、奉造立皆金色三尺阿弥陀如来像一軀。

奉書写色紙妙法蓮華經一部八卷、無量義觀音普賢阿彌陀轉女成仏般若心等經各一卷。(傍字) 別、(漫句) 奉書写妙法蓮華經

六部四十八卷、開結經各六卷。(漫句) 即排燕寝、供養演說。

(漫句) 所生惠業、併資幽靈。(緊句) 病中落飭、生前出家、(輕隔句) 合掌華開、戒香自薰其裏。双鬢煙霽、尸羅已紆其身。

(発句) 定知、(長句) 離五障五衰之塵路、赴上品上生之蓮胎。

(漫句) 功德之余、普及幽顯。敬白。

(年付日付置書) 承保四年六月廿四日。弟子正四位下行美作守兼東宮學士大江朝臣。

【校勘】 歴博本、及び一部を「言泉集」亡妻帖に拠って対校する。

1 美作守匡房 底本無、目次により補う。2 某 歴博本「乙」3 絳樹 歴博本「青琴□□イロコノミ□□也」の傍注あり。
4 無帖 歴博本破 5 羅山 歴博本「□□所居也」の傍注あり。6 悦 底本欄外に墨訂。7 年 歴博本破 8 赴 底本「起」をミセケチにし欄外に訂正。9 莊生 歴博本「庄子妻ニ後テ打盆スル事也」の傍注あり。10 盞 底本「盞」傍訓「キン」、歴博本・言泉集による。11 芒 歴博本「荒」12 更 歴博本行間補入。13 銷魂 歴博本破
14 於 底本無、歴博本により補う。15 涕泗 歴博本「ナミタ也」の傍注あり。16 七 底本この字下「七之忌辰欲満。仍奉為頓証菩提、奉造立皆金色」の十九字無、歴博本により補う。17 卷 歴博本「」18 無 歴博本「无」19 量義 歴博本「」20 普賢 歴博本「」21 弥陀 歴博本無 22 成仏 歴博本「」23 心 歴博本「」24 等 底本無、歴博本により補う。25 蓮華経 歴博本「」26 部四十八卷 歴博本破 27 結 歴博本無 28 惠業 歴博本破 29 落 底本墨減訂正。30 前出家合掌花開戒香自薫其裏双鬢煙 この十六字歴博本は行間補入。31 華 歴博本「花」32 紆其 歴博本破 傍訓「マツハレリ」。33 赴 底本「起」、歴博本による。34 学 底本「覚」と書き欄外に訂正。35 朝臣 底本無、歴博本により補う。

【訓読】

6-1 (美作守匡房が) 亡室の四十九日の為の願文

(無常句) 弟子某、敬ひて白す。「車形の」之「郷、未だ生死の」之「理りを免れ《未》。輪廻の」之「境、必ず離別の」之「悲しびに逢ふ。慟哭の」之「中、猶し忍び難きもの有り。」

(聖靈平生遁去之様) 伏して惟みるに、幽霊、累葉槐棘の「之」地自り出で、「于」繁華清英の「之」家に長ず。蘭猷惟れ馨し、五絳樹の「之」露も色を慙ぢ、玉徳玷かびるきざら無し、六羅山の「之」月も光を讓る。松茂栢悦の「之」契り、纔に暮年に盈ち、八桑弧蓬矢の「之」期、漸く旬月を待つ。而して九自界の「之」縁暗かに尽き、他方の「之」別れ忽に催す。去ぬる十七日、長に黄壤に赴く。

(聖靈追慕) 弟子、身は二莊生に非ざれば、盆を叩きて「而」歌ふこと能は不。材は三曾子に異なれども、共に三合嘗の「之」義を隔てむ。泣きて「而」又泣く、涙を「於」北芒の「之」月に灑く。歎きて「而」更に歎く、魂を「於」白楊の「之」風に

銷つ。^二鸞鏡徒らに抛ち、平生の「之」旧容何にか在らむ。鴛衾空しく委つ、往日の「之」余香猶し遺れり。視聴^六触るる所、涕泗從はざることを無し。

（作書 方に今、万々の「之」愁緒未だ断え《未》るに、七七の「之」忌辰満たむと欲ふ。仍りて頓証菩提の奉為^{おはんだめ}、皆金色三尺阿弥陀如来像一軀を造り立て奉り、色紙妙法蓮華經一部八卷、無量義、觀普賢、阿弥陀、轉女成仏、般若心等經、各一卷を書き写し奉る。別して、妙法蓮華經六部四十八卷、開結經各六卷を書き写し奉る。即ち^{二七}燕寝を排き、供養演説す。

（願意 生む所の惠業、併しながら幽霊を資けむ。病中の落飴、生前の出家、合掌の華開け、戒香自ら其の裏に薫る。^{二八}双鬢の煙り霽れ、^{一九}戸羅已に其の身に紆ふ。定めて知りぬ、^{三〇}五障五衰の「之」塵路を離れ、上品上生の「之」連胎に赴かむことを。

（廻向句 功德の「之」余り、普く^三幽顯に及ばさむ。敬ひて白す。

（年付日付位置書）承保四年六月廿四日。弟子正四位の下行、美作守兼東宮学士大江の朝臣